被災地支援

となりびと

千葉教会
石田せつ子

3・11東日本大震災被災地救援、支援活動を展開しておられるＪＬＥＲの野口牧師から、今被災地で何が求められているのかを女性の視点でみてほしいとの依頼があり、昨年12月5日の夜から6日にかけて、東教区女性会担当の小泉牧師の運転で、東教区役員の大牧姉と共に石巻に行ってきました。

仮設の集会所では、被災された皆さんとつるしびなを作りながらお茶とお菓子をいただきましたが、皆さんつるしびなを作るのに一生懸命でしたし、またお昼ご飯はそれぞれの家に帰られるのでゆっくりとお話を伺うことはできませんでした。それでもお持ちしたクリスマスプレゼントをお渡しできたことは嬉しく思いました。今回被災された女性の皆さんが何を求めておられるのかは、時間も足りず知ることはむずかしかったのですが、私たちが祈りのうちに覚えている被災者の方々に実際にお会いできたことは、お一人お一人との繋がりがより強く感じられ、本当におたずねできてよかったと思いました。今後、継続して訪問を続けられたらと思います。

つるしびな作成中 出来上がりが楽しみですね

今日のお昼は何でしょう

出来上がったつるしびな

【学童支援アルバム】その後

前回145号の会報で紹介いたしました「サウスカロライナ女性会」から頂いた献金を、学童支援アルバムへお捧げした後に、立野先生が、アルバムを受け取った方々からのお礼のお手紙を送ってくださいました。皆様にもお手紙の一部をご紹介します。

「今年の春、30年以上振りの同窓会で、癒されました。昨年の東日本大震災での津波で家屋は流出しましたが、家族はみな無事でした。数々の思い出を失い、記憶というものにも限度がありますが、写真は一生残るものです。ルーテル教会さんの信者の方々からも御支援を頂いたと聞きました。見ず知らずの私どものために、ご苦労をかけたことと思います。関わって下さった全ての方々に感謝を申し上げます。」

「家ごと何もかも津波にのみこまれ、今までの生きた証も失いました。このアルバムによって、一筋の光がさしたような気になります。ありがとうございました。」

行動し、共に生きる女性たち

女性の立場から見た震災ボランティア

千葉教会
石井　沙絵

あの日から「直接、被災地で何かをしたい！」日々、メディアからあふれ出てくる情報を見聞きする度、この思いは強くなっていった。そんな時、ＪＯＣＡ（公益社団法人青年海外協力協会）が災害救援ボランティアを募集していることを知った。ＪＯＣＡはＪＩＣＡ（独立行政法人国際協力機構）の行っている事業の1つ、青年海外協力隊事業の支援を行っている。私は2008年～2010年の2年間、青年海外協力隊としてトンガ王国で活動をしていた。ＯＢ対象の募集だったので、すぐに登録をし、本部から連絡が来るのを待っていた。すると「岩手県の釜石市で入浴介助と訪問調査をしてほしい」と連絡が来た。介護の資格を持つ女性で長期間支援できる方がいないということで、学生時代に訪問介護員2級の資格をとったが介護の仕事をしているわけではない私なんかに声がかかったとのこと。職場に協力をしてもらい、出張扱いで4月18日から6週間の支援が始まった。

石井沙絵姉

震災後、何週間もお風呂に入れなかった方々の背中を流すことがあった。久しぶりに入ったお風呂も「怖くて手すりから離れられないよ（津波が）思い出されて…」と言うおばあちゃんがいた。「津波をかぶったんだ…」ただただ聴くことしかできなかった。

今回、「女性から見たボランティア」というテーマで原稿依頼をいただいた。改めて振り返ると、自分が〝女性〟であることを考えることはなかったと思う。被災地の方々と一緒に避難所で2週間ほど過ごした。老若男女問わず、一つになって毎日を精一杯生きていた。自分が弱っていることなんか気づかず、いつの間にか難聴になっていて、日常会話が聞き取れない事態になっていた。ボランティアとしてセルフケアを怠っていた自分が情けなかった。

しかし、どんな時も被災地のみなさんにあたたかく迎えられ、一緒に働くボランティアで支え合い、何よりも千葉で待つ家族や施設のことを思うとエネルギーが湧いた。現地で活動するには、地元からの応援が欠かせないのである。

みなさんの周りにも被災地に足を運んでいる方がいることと思う。これからもどうぞ祈り支えていただきたい。大きな大きな力になっていくことだろう。

訪問調査のボランティア ラジオ局が取材

＊石井沙絵さんは、千葉ベタニヤホームで働くかたわら「2月24日、夜行バスの中で、釜石の避難所で一緒に生活していたおばちゃんに再会。寝ている方もいるので、あんまり話せなかったけど…嬉しい☆」と今も毎月スクールカウンセラーとして東北へ通い、復興に協力しているパワフルな女性です。